

協働性ある集団ですすむ建設的な対話のある校内研修の組織化

井上 美恵（学校経営コース）

1 はじめに

実習校の抱える課題の一つは「学力向上」である。そのためには、生徒の実態に合った教師の授業改善を、学校全体で組織的に取り組んでいく必要がある。そこで、実習校教師一人一人の授業改善を図る意欲を醸成し、その意欲を組織としての授業研究につなげるマネジメントの工夫に取り組み、教師の授業力向上を意図した校内研修の見直しを図りたいと考えた。

教師が協働性を高め、建設的な対話を中核に授業改善を図る校内研修（特に授業研究）の要件を明らかにすることが本研究の目的である。

2 2022年度の研究（1年次研究）

実習校では、自身の授業改善に向けて指導案を作成し実践していたが、教員同士での指導案検討会や授業参観、授業後の協議会は行わず、個々で実践授業を振り返る形であった。自身の授業課題には向き合っているが、同僚と関わりながら互いに学び合うことができれば、よりよい授業づくりができ、個々の教師の授業力だけでなく、学校全体の授業力の向上となると考えた。そこで、1年目は、実習校教師たちの授業改善を図る意欲を引き出すことと、実習校教師たちが互いに学び合うことのできる授業研究のための要件を明らかにすることを目的とした。

（1）校内研修への働き掛けの内容と実際

校内研修に対して7つの働き掛けを行い、その取り組みを「実習校教師へのインタビュー」、「観察」、「アンケート調査」で分析・考察した。7つの働き掛けの内容と実際は以下の通りである。

① 研究主題・研究内容の設定

実習校の教育目標「未来を切り拓く生徒の育成」に迫るために、校内研修の研究主題を「単元デザインと指導と評価の一体化による授業改善」として、研究内容を明確にした。

② 授業研究の体制と方法の設定

協働的に授業研究を推進していくための、研究体制と方法を設定した。グループを組んで授業研究をすることとし、教科ベースのグループ編成をした。研究主任が授業公開者を指定し、グループでその授業研究のサポートをすることとした。

③ ニーズに即したフリー研修の設定

「研修は学びがあり有意義なものだ」というプラスの実感を醸成するために、授業研究以外で、任意参加型の研修を設定した。参加者のニーズを踏まえて研修内容を決定し、その内容に長けている校内の教師が講師となって研修（ICT研修、コーチング研修、特別支援教育、心肺蘇生法研修等）を行った。8～9割の教師が研修に参加した。

④ 授業研究の推進

授業研究を計画的、協働的に推進するための仕組み作りとして、「グループ長を選出すること」、「グループ活動の「足跡シート」を記録していくこと」、「授業研究を行う上で検討会・授業参観・協議会はワンセットであること」、「授業参観では生徒の姿や変容を観察し、協議会では観察による事実を話題にすること」という4点のルールを提示した。しかし実際、各グループは、検討・協議の時間を工面できていなかった。研究主任（筆者）が声を掛けることで、指導案を検討し、授業参観まではできたが、協議会ではできなかった。

⑤ グループ活動の省察の場の設定

グループ活動の成果を、日々の授業改善に活かすことが重要である。そのため、協議会の最後に「足跡シート」に、個々が授業研究で得た学びは何か、を記述することを求めていたが、④で述べたとおり、協議会自体ができなかったため、この活動もできなかった。

⑥ 研究推進だよりの発行

授業改善への意欲を向上させるために、研究推進だよりに「りゅうトーク」を発行した。内容は、授業に関する教師へのインタビューを主とした。普段は聞けない同僚の授業への思いや工夫を記事にすることで、同僚の授業を知る機会を作った。同僚からの助言に感謝をしていたり、安心をもらったりしたエピソードも載せた。

⑦ 成果と課題を共有する場の設定

各グループの授業研究の成果と課題を話し合い、それを可視化することで、さらに一人一人の授業改善への意欲を高め、行動変容につなげようとした。④の協議会ではできなかったが、ここでグループごとの振り返りができ、グループ員の授業研究と自身の授業改善とを関連させて話し合うことができた。また、1年間の研修運営上の成果と課題、

研究主題に取り組んだことにおける成果と課題も取り上げた。

(2) 分析結果と考察

目的その1：授業改善を図る意欲を引き出すこと

観察から、働き掛け①、②により、授業研究の目標や内容が共有され、グループ活動の中で「ちゃんと授業研究したい」「推進役になっていいか」と積極的な発言がみられた。また、その後、働き掛け③で、「授業研究はなぜするの？」を題とした意見交流を行ったときに、否定的な意見はなく、「対話が大切」「教材研究と子どもの資質・能力」「学び続ける教師」「授業研究を楽しむ」にまとめることができ、授業研究や授業改善への必要性や意欲を確認し合うことができた。以上より、教師の授業研究への意欲を引き出すことができたと考えられる。働き掛け③のフリー研修においては、アンケート調査の結果、ニーズに合った校内研修への好感度は100%という結果となり、研修自体への抵抗感は以前より下がった。

目的その2：授業研究の要件

アンケートおよびインタビューから、実習校の教師たちは、授業改善や授業研究の必要性を理解していた。また、自分の授業の成果と課題も認識していた。生徒の「分かった」「できた」という姿に、喜びや達成感を感じており、また同僚からの意見で、視野を広げ、授業力を向上させたいと考えていることが分かった。さらに、指導案検討会で、同僚から勇気づけられたり、助言を得たりすることは、意欲をさらに高めることも分かった。

しかし、グループごとの活動時間の工面には課題があった。授業研究が進まなかったり、お互いの学びを促進できなかったりしたため、個々や個人間のやりとりで終わっており、組織の一員として授業改善や授業研究を行っている意識は必ずしもあるとは言えなかった。また、アンケート項目「授業研究は何のためにしているか」に対し、「自分のため」、「子どものため」に行うという回答が100%、「同僚のため」、「学校のため」との回答は0%であった。

以上より、1年目は、「内発的動機」は十分あるが、時間などの「環境」、同僚のために、学校のためという「同僚性・協働性」が十分ではなかったといえる。そのため、実習校教師たちが互いに学び合うことのできる授業研究のための要件を、次の3点と同定した。

- ・内発的動機：喜びや達成感、挑戦心や興味等。
- ・環境：時間、道具、グループ編成、風土等。
- ・同僚性・協働性

3 2023年度の研究（2年次研究）

1年目の実践から課題として挙げた「環境」と「同僚性・協働性」に着目をした。まず、「環境」として「時間」を整えることにした。具体的には、校内研修の中で授業研究を行うための時間を、「毎月30分」確保した。また、安心して対話できる「環境」を重視し、「対話をする際は授業者の意図を汲み取り、否定しない」、「授業者の立場に立って対話する」、「生徒の立場に立って対話する」といったルールを設けた。

さらに、教師個々の取組ではなく、組織として取り組むために、「協働性」を高める働き掛けを行うことにし、次の研究仮説を立てた。

研究主任が教師たちの協働性を高める校内研修における働き掛けを行うことによって、教師たちは生徒の実態に合うように授業の働き掛け（手立て）を工夫しようとして建設的な対話をするようになる。

仮説の検証は、「グループ対話のプロトコル」、「グループ活動の観察や成果物」、「実習校教師へのアンケート調査」や「実習校教師へのインタビュー」で行うこととした。

(1) 協働性を高める働き掛けの内容と実際
先行研究の協働性の定義「学校での共通の目標・課題を達成するために、成長志向をもって自発的に協力し合うこと」（牧、2011、p30；梁瀬、2022）を参考に、上記2点の環境整備を含めて、組織として協働性を高める9つの働き掛けを行った。なお、下線部は、1年目とは異なる点である。

① 校内研修の方向性を共有する場の設定

前提として、「教師も個別最適な学びと協働的な学びで深い学びをする」、「教育目標の実現には教師の授業改善は必須である」ことを共有し、今年度は研究主題を設定せず、授業研究を通して研修することを話し、校内研修計画を提示した。

② 自身の授業課題や目指す生徒の姿を考える機会の設定

研究推進委員会で、研究主題は設けないが、共通のキーワードの必要性が共有され、それを「対話」とし、授業に対話を位置づけることを必須とした。「どのように」、「何を改善するのか」といった視点から、「対話」について考察する場を設けた。その考察結果をもとに、教科混合の4つのグループをつくった。

③ 授業研究における教師の対話例を可視化

指導案検討会での好事例として、「生徒の立場で対話」「授業者の立場で意を汲んだ対話」を取り上げ、研究推進だよりに示した。

④ 対話のモデルケースの提示

研究主任（筆者）の公開授業・協議会を行った。参加した教師たちが、授業参観中に生徒の姿、様子を iPad で撮影し、授業後の協議会でその画像を見せ合いながら話し合う場を設定し、これを今後の協議会のモデルとした。

⑤ 授業研究の推進

②のグループで、これからのグループ活動の計画を立てた。自分の授業課題や目指す生徒の姿に迫るための具体策をグループで共有する場とした。

⑥ グループ活動の時間の確保

毎月 30 分の研修時間を確保し、グループ活動の時間とした。活動内容は自由。ただし、対話の仕方のルールと成果物を作るルールを設定した。

⑦ グループの成果発表会を実施

各グループは成果物をもとに発表し、全教師で共有する機会を設定した。必ず全教師が、グループ員の授業研究を通して何を学んだか、自身の授業課題にどう生かしたかを発表することにした。

⑧ 教師の学びの可視化と共有

⑦の発表を振り返り、各教師の成果と課題、校内研修（授業研究）としての成果と課題を考える機会を設定し、全教師の学びを共有した。

⑨ 研究推進だよりの発行

協働性の高まりや、教育目標への意識化をねらった活動の価値付けや賞賛を意図して作成し、教師のインタビューを主な記事にした。

(2) 分析結果と考察

① 各グループの対話の量的分析・考察

各グループの対話が、授業者や生徒の立場に立って、生徒の実態に合った工夫を検討しているか、を分析した。分析対象は、毎回のグループ活動の録音データに基づくプロトコルである。授業者以外の教師たちの発話を、「質問」「承認」「生徒の立場」「授業者の立場」「提案」（北村・赤坂（2021）を参考に枠組みを設定）に分け、授業者が受けた発話の回数、悩み・不安についての発話の回数を数えた。

おおむねどの対話も「質問」「承認」「生徒の立場」で8割、「授業者の立場」1割、「提案」1割だった。検討会では「質問」、協議会では「承認」「生徒の立場」、お悩み相談会では「質問」「承認」の割合が高かった。模擬授業では、「提案」3割となった。事前の検討会の対話では、授業者は悩みや不安を話していたり、グループ員から言われた

意見を取り入れていた。発表会に向けての打ち合わせでは、「提案めいた質問」と「承認」が他より高かった。

これらの分析結果から、授業者以外は授業者の意図を汲み取ろうとし、授業者の立場に立ったり、生徒の立場に立ったりしながら授業について対話をしていたといえる。授業者は悩みや不安を相談でき、対話を通して、生徒の実態に合った授業の働き掛け（手立て）をしようとしていた。

② 各グループの対話の質的分析・考察

各グループの対話がどのように建設的であったのかを分析した。プロトコルを対象に、対話が目的的吗かどうか、対話の内容や雰囲気はどうか、を質的に分析した。

「授業者の先生のために」と活動始めに言っていたり、授業者がグループ員に自ら悩みを話し始めていたりしたため、どのグループも「授業者に協力しよう」というグループ内の共通の目的をもって対話をしていたことが分かった。

実習校教師たちは、どの意見も認めながら、よりよい授業に向かって見方・考え方を広げる柔軟な対話をしていたり、1つの意見やアイデアからよりよいものを求めて、さらに意見交換し、新しいアイデアを出し合って選択肢を増やしたり、それぞれが思ったことを言い合いながら新しい価値観を見出していたり、目的に向かって整理しながら解決を図ろうとしたりといった建設的な対話をしていた。

どのグループのどの対話においても感情的・攻撃的な発話は全くなかった。また、発話をしない人もいなかった。さらに、グループ検討ではユーモアを交えるなど、真剣な話し合いの中にも、温かく、リラックスした雰囲気があったといえる。

③ グループ活動の観察と成果物からの考察

各グループで協働性を高めていたか、生徒の実態に合うように授業の働き掛けを工夫していたかを考察するために、筆者の観察と各グループの成果物を分析した。

グループ長が進行や調整を行い運営しており、グループ員は協力的であった。設定した時間以外にも活動をしていたグループがあった。成果物が量・質ともに高いものに仕上がっており、発表からも全教師が学びを得ていた。

実習校教師たちは、生徒の実態に合わせようと授業改善を目指し、目的をもって成長志向で自発的に協力していることが伺えるので、協働性を高めていたといえると考えられる。

④ アンケート調査の結果からの考察

本研究の校内研修への働き掛けは有効だったのか、グループでどのような対話が行われたか、同僚と協力し合いながら授業研究をしようとしていたか、実習校教師はグループ活動を通して何を学んだのか、を実習校教師にGoogle フォームでのアンケートを実施し、19名の回答を得た。アンケート項目は選択式23問、記述式3問。以下、アンケート結果からの考察を述べる。

研究主任（筆者）が行った校内研修における働き掛けは、個々の、または、学校全体の授業力向上に対して、おおむねどの働き掛けも有効だったといえる。特に、授業課題を明確にすることやグループでの授業研究が、授業力向上につながっているという結果であった。自分自身そしてグループでも目的をもち、同僚と対話しながら協働的に授業改善をしていくよさを認識したと考える。

実習校教師たちは、互いを尊重し、子どもの立場を大切にしながらよりよい授業を求めて、建設的な対話できていた。それらの対話は教師たちにとって安心できるものであり、多くのことを学ぶことができるものであった。

実習校教師たちは、グループ活動を通して、同僚と関わることで得る学び（特に自分にはない視点からの子どもの見とり）、それを自分に生かしたいという成長志向の期待や自分も生かすことができたという実感をもつことができていた。

⑤ 授業者へのインタビュー

授業者は、生徒の実態に合うように授業の働き掛けを工夫しようとしていたのか、グループ活動についてどう考えているのかを公開授業後に20分程度のインタビューを行った。

授業者は、グループ活動を通して助言を参考にしたり、自発的に同僚と協力し合っていたりして、生徒の実態に合うように授業の働き掛けを工夫しようとしていた。また、授業者は、助言をくれるグループ員に感謝をしていたり、頼りにしていたりしていた。

(3) 仮説の検証

研究主任が実習校教師たちの協働性を高める働き掛けを行った結果、実習校教師たちは、授業研究において、授業をよりよくしよう、同僚の役に立とうという目的をもち、子どもの立場に立ったり、異なる意見も受け入れて新しいアイデアを出したりしながら、生徒の実態に合うように授業の働き掛けについて建設的な対話をしてきた。また、授業者の意図を汲み取ったり、否定しないで傾聴したりして、安心できる雰囲気に対話をして

いた。さらに、校内研修での知見を、個々の授業改善に生かそうとしていた。同時に学校での共通の目標・課題に対する協働性も高まっていた。

また、2年目は研究主任（筆者）の介入する場面がなく、各グループが自走して活動していたことは、働き掛け⑤⑥⑦の効果が大きいととらえており、研修時間の確保と教師の自律性の尊重が関係していると考えられる。

4 本研究の総括

教師が協働性を高め、建設的な対話を中核に授業改善を図る校内研修（特に授業研究）の要件を明らかにすることが本研究の目的であった。そのために、研究主任の校内研修での働き掛けを意図的に仕組み、実践し分析を行った。

実習校教師たちは、「内発的動機」「環境」「協働性」という要件を満たすことで、建設的な対話を中核に授業改善を図り、お互いに授業力を高め合い、学び合い、協力し合っていくことができた。これらの要件のための働き掛けとして、「授業研究を通して目指す目標・目的を共通理解し、一人一人の教師の授業改善の意欲を引き出すこと」、「研究推進だよりを同僚の授業を知ることができるツールとして活用すること」、「ニーズが同じである同僚とグループを組んで、自律的に活動できるようにすること」、「対話を通して学び合う時間の確保や協働的に対話ができる対話の仕方を設定すること」が有効であったといえる。

今後の課題は3点ある。1点目として、3要件は、実習校教師から同定されたものであり、汎用性・一般性を有した要件の明確化が必要である。2点目は時間の確保である。どのように設定するかによって、多忙感ややらされ感につながる恐れもあり、組織マネジメントが不可欠といえる。3点目は、教師間での意識の違いである。アンケートにおいて否定的な回答は少なからずあり、また授業研究での取り組み方にも差異がみられる。それらの対応・工夫を考える必要がある。

〈引用文献・参考文献〉

- 北村由実・赤坂真二（2021）熟練教師の対話を通じた省察に関する事例研究「上越教育大学教職大学院研究紀要」第7巻 pp. 1-12
- 牧郁子（2011）学校の雰囲気と教師の協働—チーム援助の土台として— 児童心理2月号臨時増刊第65巻・3号 pp. 27-34
- 梁瀬加那子（2022. 12）教師の協働性を高める校内研修のデザイナー—ミドルリーダーのリーダーシップに着目して— 令和4年度日本教職大学院協会研究大会資料